

パウロはギリシャにあるコリントという町に伝道したのですが、その町の近くにアテネという町がありギリシャ哲学が盛んでした。なかなか伝道するに容易ではありませんでした。しかし、パウロは臆することなく大胆に御言葉を宣べ伝えていくのです。18節に「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」とパウロは言います。

今からもう50年ぐらい前でしょうか。「神は死んだ」という言葉が流行りました。ニーチェという哲学者が言ったのですが、ベトナム戦争が泥沼化してアメリカ人のみならず日本人の私たちも深刻な影響を受けていた時でした。その当時は教会でも何かニヒルっぽい雰囲気が漂っていた気がします。今の状況もウクライナとロシアでの戦争で似ていますね。でも現在ニーチェの言葉は聞こえてきません。不思議です。なぜでしょう。私は考えるに神は死んだのではなく、元々いなかったのではないのか、そう考える人が多くなったのではないのでしょうか。つまり無神論です。そう考えると現代人の心は前よりもっと退廃的になっているのではないのか。深刻な状況です。そのような時代に教会は立たされているのです。

ギリシャは先進文化の町でした。一方、パウロの信仰はユダヤという地方の信仰でした。こういう言い方はいけないのですが、言ってみれば田舎の信仰です。まるで巨人ゴリアトと少年ダビデの戦いですよ。でもダビデが勝ったのです。19節にあるように「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味のないものにする」と言って、パウロはイザヤ書を引用します。「賢者の知恵は滅び、聡明な者の分別は隠される」（イザヤ書 29:14）からです。パウロがアテネに行った時の事、この町で至る所に偶像がありパウロは憤ったのです。そして、エピクロス派やストア派の数人の哲学者と討論した折、「このおしゃべりは何を言いたいのだろうか」とか「どうも外国の神々を宣伝しているらしい」と嘲笑ったのです。パウロはかえって闘争心が沸きあがりひるまず宣べ伝えたのです。読んでいて心に迫ります。決して負けてはいないのです。そして、彼はアレオパゴスの真ん中に立って群衆相手に大説教するのです。人々は死者の復活を聞くと嘲笑ったのですが、中には信仰に入った者もあり、議員や婦人たちもいたのです（使徒言行録 17章）。死者の復活、それは十字架上で死なれたイエスが蘇られたという話です。大変ショッキングな話です。旧約聖書では十字架に掛けられた人は神に呪われた人なのです。申命記には「木にかけられた者は、神に呪われた者」と書かれています（申 21:23）。然るに、なぜそのような人が救いになるのか。そこに神の秘儀があります。神は人間を愛しておられるので、何とかして救おうとされた。それ故、ご自分の分身であるイエスを地上に送られ、救いを全うされたのです。イエスをキリストと信じる者は命に預かります。この真理は伝道者が100回伝えても、聴いている人の時が来ないと真理であるとわからないのです。その人の時期が来て、ある日突然聖霊によって示さ

れるのです。幾ら聖書を読んでも、知識としては積まれるかもしれないけれど、その人の神の時が迫らないと悟らないのです。その人の神の時が来ると、誰が反対しようが、家族中で反対されようが、イエスさまを受け入れたいと願うのです。神は宣教という愚かな手段によって、信じる者を救おうとお考えになったのです。この呪われた十字架は異邦人には愚かでしたが、信じる者には命の源泉になるのです。21節にこうあります。「世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです」とあります。ここに宣教という愚かな手段とあります。この愚かな手段とは何でしょうか。この愚かな手段というのは十字架につけられたキリストを宣教するということです。十字架につけられる人間は罪人です。罪を犯した人です。真っ当な人間は十字架には付けられないのです。そのような人を宣伝するなんて、救い主として伝道するのは、何と愚かなことだ、とユダヤ人は考えているのです。いいえ、ユダヤ人だけではありません。この世の多くの人々は考えるでしょう。口には出さないけれども内心そう思っているのです。でも霊を与えられた人は違います。人間の罪を贖罪するために、贖うために十字架に掛けられたのだと考えるのです。他の宗教の方々は愚かだと思うでしょう。あからさまに直接言われたことはないけれども、キリスト者は馬鹿げた話を信じていると思っているのでしょうか。でもこの馬鹿げた話が大変重要な教えになっているのです。何しろイエスが十字架に掛けられなければ救いの話はないのですから。そして復活がなければ教会は生まれなかったのです。キリスト教は愚かさの上に成立しているのです。このような世の人が見たら愚かな宗教を、全世界の人々の約3分の1の人々が信じているのです。世は自分の知恵で神を知ることが出来ないと、パウロは言います。幾ら聖書を読んでも、それは知識であって神には至らないけど教理としては学問的には身に付きます。パウロも律法を熟知していたけども救われなかったのです。パウロはその当時、最高の学問を身につけユダヤ教の最高の指導者であるところのガマリエルの門下生として筆頭の弟子でした。そのようなパウロは律法を守れば守るほど学問をすればするほど虚しさを感じ自分に内在する罪に悩んでいたのです。パウロは言います。「わたしは自分の内には善が住んでないことを知っています。善をなそうとする意志はありますが、それを実行できないからです。」(ローマ7:18)と悩んでいたのです。これが人間の現実です。パウロは己の罪、自己矛盾を見つめた時、神に至る道を示されました。誰が救われるか、それは神のみがご存じなのです。神は救いたいと思う人を救われる。ローマ書にあるように「『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書いてある通りです。では、どういうことになるのか。神に不義があるのか。決してそうではない。神はモーセに『わたしは自分が憐れもうと思う者を憐み、慈しもうと思う者を慈しむ』と言っておられます。従って、これは、人の意志や努力ではなく、神の憐れみによるものです」(ローマ9:13~16)と言っています。不条理かもしれないけど神のお決めになったことです。

さっきの話ですが人間、無神論になると自分が偶像になるのです。自分が神になってしまう。こんなに恐ろしいことはありません。自分の罪を認めなくなってしまう。昔、ラジオで

「子ども電話相談室」という番組がありました。それを聞いていたら、ある評論家がこう言ったのです。「神というのはね、人間が作ったものなのよ」と言っていました。こういうことを子供たちに言ってもらいたくはなかったです。公共の電波ですから。子供は素直だから信じてしまうかもしれません。恐ろしいことです。「三つ子の魂、百まで」と言います。わずか3歳の幼子でも聞いた話は百歳まで残るのです。そのような話を無責任に植え付けないでもらいたいと思います。神は愛であると聖書は教えます。その教えが保育の基本中の基本で、子供は安心して神の愛の下で育つのです。一方、悪いことをしたら神はお怒りになると教えます。ですから子供は、神は愛であるけれども、いけないことをしたら怒られると認識するのです。ディズニーランドに行かれた方も多いと思いますが、最後のパレードで白雪姫が出たり、天使が出たり、ミッキーマウスが現れたり子供は喜ぶと思うけれど、最後に悪魔が恐ろしい顔をして登場するのです。子供は怖い思いをするでしょう。ウォルト・ディズニーさんはアメリカの共和党の人なのです。共和党は熱心なクリスチャンが多いのです。きっと彼は子供たちに夢ばかり与えるのは良くないと考え、悪魔も登場させたのではないのでしょうか。子供たちはそうやって世の中を学びます。

22節と23節「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシャ人は知恵を探しますが、わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシャ人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです」とあります。ユダヤ人は目に見えるしるしを求めます。十字架上のイエスには神のしるしはありませんでした。ギリシャ人は理性的に判断できる答えがなければ受け入れないのです。しかし、パウロは十字架につけられた主イエス・キリストそのものを伝えるのです。それしか救いはないからです。前ある新聞にこのような投稿がありました。「私はある日、教会に出席し礼拝をしました。ところが牧師が説教でしきりに人々を罪人呼ばわりしていたけれど、私はそんなに罪人呼ばわりされるほど悪いことはしていない、心外だ」とありました。罪人というと普通は何かの刑法を犯して刑務所に入れられた人を言いますが、キリスト教でいうところの罪人はそのような意味ではなく、神さまに対して的外れの生活をする人を言うのです。神さまの的の中心に矢が刺さればいいのですが、はずれてしまった的の外に矢が刺さると的の外れの生活になり罪人になるのです。ですから信仰が長くてもたとえ、信仰暦90年の人でも的の中心に刺さると正しい生活なのですが、はずれると的の外れの生活になり罪人となるのです。ですから信仰暦が長いからその人は正しい人だとは言えないのです。長い人でも的の外れの人はいるものです。ですから人間死ぬまでイエスさまに罪を拭って贖っていただくかなければなりません。そのような意味でその牧師さんは言われたのではないのでしょうか。25節は読み解くに難しいところです。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強いからです。」これはどのような意味なのでしょう。十字架上のキリストは首をうなだれて、いかにも弱々しい姿ではあるけれども、しかし人間の愚かさよりは賢い。十字架上で死なれたキリストはやがて復活され人々に救いをもたらすので人よりもはるかに強い。と教えている

のです。十字架は虚しいしるしのようだけれど、そこには秘儀が込められており、やがて神はキリストを復活させ神の右に座らせてくださる。だから人よりも強い、と語っているのです。コリントの教会はローマ人、ユダヤ人、ギリシャ人がいました。20万人の自由人、40万人以上の奴隷がおり、コリント教会の構成員は家柄のある者や能力のある者はそんなに多くはなかったでしょう。中にはユダヤ人の会堂長のクリスポ、ガイオという裕福な人も来ていたのですが。多くは庶民だけれどその人たちが大きな働きをしたと言っています。神は奢る者には目もかけず、あえて、弱い者、無きに等しい者に目を掛けられます。その頃のローマの映画を見ても想像がつかます。彼らは宴会をし飲み歩き飲みつづれ過ごします。神は知恵ある者に、力のある者に、地位のある者に恥をかかせるため、貧しく弱い者を召されたのです。召すとは神がその人に信仰を与えることです。それは神の選びです。私たちもそうではないでしょうか。神はお一人お一人に目を留められ召されたのです。このように信仰生活を送れることは何という幸いでしょう。十字架の言葉は神の力なのです。一見平凡な生活ですが、その平凡には神の秘儀が与えられているのです。そのことを感謝し信仰生活を送りたいです。